2007年
夏
7月1日発行■通巻6号

市民一人ひとりの生涯学習を支援する情報誌

季刊ゆとろぎ

発行：羽村市教育委員会／企画・編集：羽村市生涯学習センターゆとろぎ＋ゆとろぎ協働事業運営市民の会

新連載
私の生涯学習
第2回

写真との幸運な出会い……
カメラを抱えて過ごす時間が
私の元気のもと

藤田ひろみさん

新・楽学遊空間

第38回日展 文部科学大臣賞受賞記念特別展

並木恒延
うるし30年の軌跡

撮影／村山利夫

新連載
私の生涯学習
第２回

市内にはこつこつと創作活動や学習活動に取り組んでいる市民の方々がたくさんいます。春号から始まった連載「私の生涯学習」は、そうした市民の方々の生涯学習に取り組む姿をご紹介します。第２回は定年退職してから趣味の写真を撮り始めて、国際的な評価を得るまでになった女性のお話です。

藤田ひろみさん

1936年、東京市神田区猿楽町（現在の東京都千代田区）に生まれる。小学３年生のとき、父親が台湾総督府勤務だった関係で、台北市で終戦を迎える。終戦直前の混乱の中で父と死別。母と幼い弟の３人で１年を越える抑留生活を経て、引き揚げ船で帰国。引き揚げ船での経験を「頑張りの原点」に明るく前向きに生きることを信条にしている。現在、羽村市シルバー人材センター理事、総務部長、女性部副部長としても活躍。

写真との幸運な出会い……カメラを抱えて過ごす時間が私の元気のもと

藤田（ふじた）ひろみさん（71歳）

写真屋さんの一言

藤田ひろみさんは、建築関係の出版社に25年務めた。現役の頃は、何かの記念に家族写真を撮る程度で、写真を趣味にするほどの余裕もなかった。ある時、突然、会社からカナダへ出張を命じられた。初めての海外旅行、しかも出張である。戸惑いながらも、滞在中は借り物のカメラで仕事の写真もプライベートな写真もはりきって撮りまくった。帰国後、会社のそばの写真屋さんへ現像に出したところ、そこのご主人が「すごく奇麗に撮れているからカレンダーにしなさい」と褒めてくれた。写真の善し悪しを判断できる知識もなく、半信半疑ながらも、「自分が撮った写真を褒められたことがとてもうれしかった」。

執念の写真教室

写真を勉強し始めたのは定年退職してからのこと。たまたま、羽村の勤労福祉会館（当時）で花森俊一先生指導の『女性のための写真教室』が開催されることを知り応募。しかし、抽選で敢えなく落選。「悔しかった」と苦笑する。一年後、執念が実って受講生に。63歳だった。

初めは、インスタント・カメラ持参で出席。「一眼レフの意味さえわからなかった。「一年待たされた悔しい（笑）」思いから、あらゆることを聞き漏らすまいと、講義録が手帳3冊に及ぶほど熱心に受講した。講座修了後、同期生と写真グループを結成し、花森先生が『フォト・ミレニアム』と名付けてくれた。その活動は現在も続いている。

仲間とあちらこちらと出かけて行って、風景や草花を主体に撮影を楽しんでいるうちに、「ねがらみ前水田」の案山子（かかし）を撮った一枚が『広報はむら』の表紙写真の公募に初当選（２００１年９月１日号）。自分の写真が「作品」として認められたことがうれしくて、ますます熱が入った。２００２年、仲間の斉藤美和さんに誘われて、海外に日本を紹介するカレンダーの写真コンテスト（日本郵船航空主催）に応募。『薪能』と題する1点が入選し、翌年は3点が入選するほどに上達した。

出会い

熱意は思いもかけない出会いにつながった。２００４年の秋、藤田さんは、小平で薪能のプレイベントとして撮影会が行われることを新聞記事で知った。慌てて機材を抱え駆け付け、無我夢中で撮影。気づいたら「フィルムの予備を忘れていた（笑）」。ところが、まったく偶然にも、ある写真の会の参加者に向けて、フィルムの予備があるので希望者は申し出るようにというアナウンスが流れた。藤田さんは、一瞬迷ったが、思い切って「会の参加者ではないがフィルムを譲ってもらえないか」と申し出たところ、応対してくれた人物が快く譲ってくれた。おまけに「フィルムを現像してプリントして送ってあげる」とまで言ってくれた。能楽写真家の神田佳明先生との出会いだった。後に神田先生の薦めで、そのときに撮影した『羽衣』を先の海外向けカレンダーのコンテストに応募し、２００５年度の10月用に入選した。これが縁で神田先生の数少ない門下生の一人に認められた。被写体を日本の伝統芸能に広げて撮り続け、２００７年1月には、第一回能楽写真コンテストで入賞の栄誉を射止めた。

新しい世界

能の写真は、演目の内容を理解していなければ「その瞬間」をとらえることができない。そのために、能に関する様々な事柄を勉強しなければならず、興味の領域も行動範囲もどんどんと広がった。「自然や風景写真ももちろん好きだけれど、日本の伝統芸能や祭りを大事にしたい」と言う。また、「これからはデジカメの時代。気後れせず、デジカメでもどんどん撮って行きたい」とも。うれしいことに、息子さんがデジカメをプレゼントしてくれた。娘さんも常に応援してくれている。

昨年、厳島神社の能を撮影するために東京と広島を2往復した。うち1回は日帰りで。また、ヨーロッパのコンテストでも2回受賞し、その一つで授賞式に招かれて南フランスまで出かけた。71歳を迎えた藤田さんのスケジュールはびっしりである。「台湾からの引き揚げ体験がパワーの源なのかもね」とおおらかに笑う。秀逸なのは、公民館で開催された英会話教室が縁で横田基地の飛行クラブのメンバーになり、セスナ機の操縦も経験したとか。71歳にして好奇心おう盛、パワフルな女性である。（取材・日下田まや）

※この連載の趣旨に該当する市民の方の情報をお寄せください。羽村市生涯学習センターゆとろぎ☎042（570）0707

ゆとろぎホール

ゆとろぎで開催される2007年度後半の芸術鑑賞事業をご紹介します。プロの演奏家が『コンサートホールにも負けない』と太鼓判を押すゆとろぎ大ホールで市民のみなさんに「ゆとり」と「くつろぎ」の時間を存分に楽しんでいただけるコンサートや演劇、芸能の公演だけでなく、市民のみなさん自身にも参加していただき、“歓喜の歌声”で埋めようという企画も進んでいます。あなたも大ホールの感動を体験しませんか？

最高峰の交響楽団がニューイヤー・コンサートをゆとろぎで……

「ゆとろぎ市民の会」の芸術鑑賞部会は『市民のみなさんに「ゆとり」と「くつろぎ」のもと、質の高い芸術鑑賞の機会を提供する』を基本コンセプトに、公演事業を企画しています（7月以降の羽村市教育委員会主催の予定は下表参照）。その中から、現在進行中の超目玉情報をご紹介します。

クラシック音楽の醍醐味はなんといっても「交響楽」です。ゆとろぎでは、世界からも高い評価を得ている交響楽団『新日本フィルハーモニー交響楽団』を招いて、「ニューイヤー・コンサート」の開催を着々と企画進行しています。

新日本フィルハーモニー交響楽団は、1972年にあの小澤征爾氏によって設立された、世界に誇る日本最高レベルの交響楽団です。墨田区の『すみだトリフォニーホール』を日常活動の拠点に、多摩地区では稲城市の『パルテノン多摩』で定期演奏会を開催しています。また、全国の小中学校での音楽教室や各種施設でのミニ・コンサートなども行い、地域に根ざした音楽活動にも熱心に取り組んでいます。

「ニューイヤー・コンサート」といえば、70年の歴史を持つウィーンフィルが代名詞ともなっていますが、ゆとろぎでは、2008年以降もニューイヤー・コンサートを継続的に開催し、「音楽のある町、はむら」の恒例事業として育てていければと考えています。次号で詳しくお伝えします。

ウィーン学友協会には及ばずともひけを取らない、「ゆとろぎニューイヤー・コンサート」にご期待ください。

世界にただひとつ 不思議な“楽器”の音楽会

撮影／佐々木敏晴

ストリングラフィー・コンサート

公演日　9月22日（土）　開場午後6時／開演午後6時30分
会　場　ゆとろぎ大ホール
入場料　大人（前売り）1500円／（当日）1800円
中学生以下800円

ストリングラフィー

この耳慣れない楽器、実は、世界にただ一つしかないのです。それも日本にだけ。他のどこにも存在しない楽器なのです。ストリング（糸）とグラフィックアートの「グラフィック」を組み合わせて『ストリングラフィー』と考案者の水嶋一江さんが名付けました。特徴を大まかに言いますと、最長で15メートル、短いもので1メートルの「絹糸」に「紙コップ」を取りつけて精密に調弦し、メロディーを奏でるものです。

「なあんだ紙コップかあ」「糸電話かあ」と思った方も多いことでしょうが、いえいえ、これがなかなか侮れないのです。音域は広く、弦楽器の滑らかな音、沖縄三味線をつま弾く音、太鼓の音など音色も多彩。フランス・イギリス・オーストリア・デンマークなど、海外でも大好評なのです。

聴いて楽しい、観て楽しい「ストリングラフィー」が奏でる不思議な音楽の世界をあなたも、ぜひ、体感してみてください。（近藤静子）

完売御礼

●宝くじ文化公演●

レニングラード国立バレエ

公演日　8月2日（木）　開場午後6時／開演午後6時30分
会　場　ゆとろぎ大ホール
入場料　一般3000円／高校生以下2000円

入場券発売日の6月2日、午前4時過ぎから並んだ人もいて、昼前にはゆとろぎでの発売分はほぼ完売。西多摩地区でのバレエ公演は少ないので、「身近な場所で気軽に楽しむことができる」とバレエファンに喜ばれました。また、「本物のバレエを一度観たかった」という人もいて、人気の高さを物語っていました。公演をどうぞお楽しみに！

2007年度芸術鑑賞事業の開催予定

開催月日	事業名	入場料・その他
7月8日（日） 開演 16:00	金管五重奏による ドラゴン・クエスト　コンサート	一般 3,000円 中学生以下 2,000円
8月2日（木） 開演 18:30	宝くじ文化公演 レニングラード国立バレエ	完売御礼
9月22日（土） 開演 18:30	絹糸と紙コップの不思議な音の世界 ストリングラフィー・アンサブル	一般（前売）1,500円 （当日）1,800円 中学生以下　800円
10月27・28日 11月3・4日 11月24・25日 （いずれも土・日曜日）	第38回羽村市文化祭　音楽部門 同　芸能部門ほか 同　舞踊部門	入場無料
12月19日（水）	劇団なかま公演 「森は生きている」	詳細企画中
1月	新日本フィルハーモニー ニューイヤー・コンサート	詳細企画中
	ミュージカル	詳細企画中
	ゆとろぎ寄席	詳細企画中
3月	ゆとろぎ寄席	詳細企画中

※羽村市教育委員会主催の芸術鑑賞事業の予定です。この他に一般主催の公演・コンサートなどがあります。
※各事業の開催日、開催内容などは変更になる場合があります。
※生涯学習センターゆとろぎは原則として毎週月曜日休館です。月曜日が祝日の場合は開館します。

※チケットの購入・問い合せは生涯学習センターゆとろぎ☎042（570）0707へ

ゆとろぎ ギャラリー

第 38 回日展 文部科学大臣賞受賞記念特別展

並木恒延
うるし 30 年の軌跡

■開催日：9 月 19 日（水）～ 30 日（日）　10:00 ～ 17:00 ■会場：ゆとろぎ展示室（ギャラリー）
■入場無料■ 9 月 23 日（日）14:00 ～　公開制作とギャラリートーク／ 29 日（土）13:30 ～
漆芸体験教室（いずれも予定）。

第 38 回日展　文部科学大臣賞受賞　『潮の紋』（145.5 × 112.0 センチ）

撮影／村山利夫

羽村市在住の漆芸家、並木恒延さんが第38回日展において、文部科学大臣賞を受賞した。記念作品展を前に多忙な並木さんを自宅アトリエに訪ねた。

受賞作『潮の紋』は湘南の稲村ケ崎海岸に取材した。夕暮れの波打ち際に移ろうさざ波が作り出す泡沫の文様を卵殻（らんかく）で、金粉の蒔きで流木を表現した作品である。並木さんがこだわり、また得意とする技法である。

塗りや研ぎを繰り返し、金粉・金箔や螺鈿（らでん）、卵殻を用いて絵柄を表現する技法は平安時代以降に確立されたという。並木さんは伝統を守りながらも、独自の画法で現代の美術としての「漆芸」を開拓した。「誰もやらなかったことをやりたい」と言う。黒が基調の漆の世界で陰影や立体感を表現する並木さんの作品は「叙情に満ちた独自の絵画的な表現世界」と高く評価されている。

「漆芸」は画材も技法もほぼ完成された世界である。並木さんは天然の素材にこだわっている。後人に残された道は狭い。だからこそ、「自分にしかできないものを追求する愉しみがある」とも言う。

一つの作品に要する時間は約二か月ほどである。小品も大作も時間はさほど変わらない。「伝統」という制約の中でオリジナリティーを求めて「人よりも数多くの作品を制作する」ことを自らに課している。年間60点から80点の作品を生み出す。「正確に数えたことはないが……」と言いながら、自らも目を丸くした。

並木さんは「震える心」をなによりも大切にしている。「旅先の風景の中に『あっ』と感じる景色がある」と。常にその瞬間を意識している。家族旅行に出かけても「つい、作品のモチーフを探してしまう」と苦笑する。

最近、「震える心」を磨くために、ゆとろぎの『短歌入門講座』にも通い始めたそうだ。今年、「漆」に魅せられて32年目の夏を迎える。

1949 年、西多摩郡西多摩村（現羽村市）生まれ。69 年、東京芸術大学工芸科デザイン専攻に入学。金工・染色・版画などさまざまな研究室に出入りする中で漆芸を初めて体験する。73 年、同大学卒業後、（株）三越（宣伝部）入社。休日を利用して同大学の漆芸科に出入りする。75 年、三越を退社し、同大学大学院の漆芸講座に入学。漆芸を本格的に学ぶ。77 年、大学院修了後、研究生となる。修了制作が芸大買い上げとなる。同年、日展、日本現代工芸美術展に初出品、初入選。03 年、日本現代工芸美術展にて内閣総理大臣賞受賞。06 年、日展にて文部科学大臣賞受賞など、受賞多数。現在、日展評議員、現代工芸美術家協会監事、日本文化財漆協会常任理事、日本漆工協会理事。

※詳しくは9月発行の『月刊ゆとろぎ』または『広報はむら』をご覧ください。

※問い合せは生涯学習センターゆとろぎ☎042（570）0707へ

ゆとろぎギャラリー

ゆとろぎの１階には、充実した照明・展示設備を有する展示室（ギャラリー）があります。一般貸出しとともに市民ギャラリーとして年間を通してゆとろぎ企画の美術展を開催し、アーティストと直接交流するイベントも進めています。普段着のままで気軽に“ほんもののアート”を鑑賞できるゆとろぎへお越しください。

ゆとろぎへ“美術の散歩”しませんか？

ゆとろぎ展示室（ギャラリー）での主催事業を企画運営する市民の会展示部会（ギャラリー運営委員会）は、展示事業を通して市民のみなさんにアートの楽しさ、文化の大切さを発信するとともに、市民のゆとろぎ事業への参画、アーティストとのコラボレーション、次世代を担う人材の育成などを今年度の事業方針にかかげて展示事業を推進しています。

今年度は既に『漆原智良の世界・山中桃子原画展』、『水引アート展』などユニークなアートの世界をお楽しみいただきました。７月以降の羽村市教育委員会の主催事業は下表の通りです。各事業の詳細は『月刊ゆとろぎ』、『広報はむら』などでご確認ください。

この他にゆとろぎ展示室では個人や一般団体主催の展示がほぼ毎月予定されています。散歩の途中にゆとろぎで目と心をリフレッシュしてみてはいかがでしょうか。

大臣賞受賞作家展

９月19日（水）から30日（日）の日程で、昨年の「日展」で文部科学大臣賞を受賞した並木恒延さんの漆芸展（右頁参照）を開催します。同賞受賞作を含めた秀作の数々を展示する予定です。

また、陶芸の分野で文部科学大臣賞奨励賞を受賞した、陶芸作家・臼井一紀さんの作品展を２００８年２月29日（金）から３月13日（木）に予定しています。詳細は本誌の冬号で特集を組んでお伝えします。

西多摩百景写真展Ⅱ

「西多摩再発見」を主旨に行われている写真コンテスト『NISHITAMA 百景』の入選作の写真展を７月24日（火）から８月５日（日）の10時～17時まで開催（月曜日休館）します。入場無料。

同コンテストは回を増すごとに応募者が増え、今回は応募総数３６０点、入選１２４点を数えました。最優秀賞に岩田敏江さん（瑞穂町）の『鬼ごっこ』が、また、粟村幸一さん（あきる野市）のグリーンロード　季節はずれの雹（ひょう）』が特別賞をそれぞれ受賞しています。今回の写真展に併せて、羽村市出身の写真家・故桜井保秋氏の作品も特別展示されます。

アート in はむら展

第７回を迎えた『アート in はむら展』を８月28日（火）から９月16日（日）まで、講座室・学習室を除くゆとろぎ全館を会場に開催します。入場無料。月曜日休館。最終日を除き、９時～22時まで。

昨年度は主に多摩地区在住の現代美術作家46人による平面、立体作品約１００点が参加。期間中に開催された「ギャラリートーク」は、作家自身による作品の解説や質疑応答もあって、今や本展の人気イベントとなっています。また、小中学生を対象としたワークショップも行われ、完成した作品はゆとろぎ３階にある創作室のショーケースに展示されました。今年は、より多くのみなさんに楽しんでいただけるように、開催期間を３週間に延長して行います。また、ギャラリートークとワークショップは９月８日（土）に開催の予定です。どんなアーティスト・作品にお目にかかれるか、お楽しみに！

『NISHITAMA 百景』最優秀賞受賞作品
『鬼ごっこ』（撮影・岩田敏江さん）

ゆとろぎを〝美術館〟に
……生涯学習施設のユニークな試み……

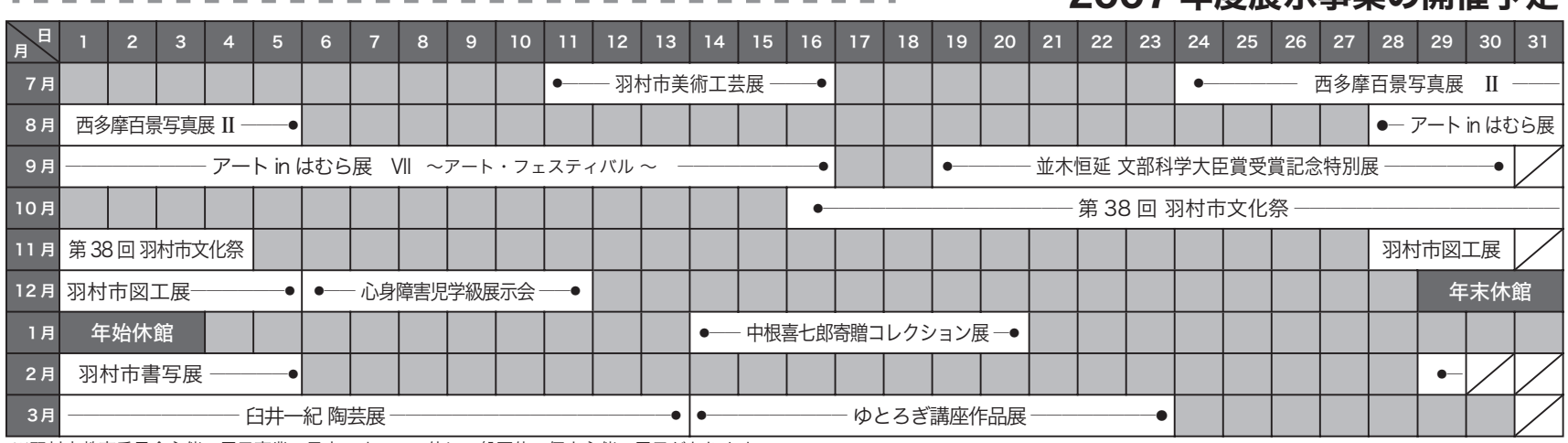
今年６月から、展示部会（ギャラリー運営委員会）はＴＡＣネットワーク（原田丕代表）と連携して「ゆとろぎ美術館」を開催しています。

これは、羽村の生涯学習・芸術文化の拠点であるゆとろぎをソフトウエア（事業）で〝美術館〟にしようという企画で、年間を通して市民のみなさんに質の高い現代美術鑑賞の機会を提供し、併せて多摩地区在住の美術作家に発表の場を提供することが主なねらいです。美術展開催期間中には出展作家によるワークショップを行い、市民のみなさんが身近に、気軽に美術作品を鑑賞できるだけでなく、「創作するおもしろさ」も体験できるように企画しています。

美術教諭として松林小学校で「学校美術館」を実践し、子どもたちが身近な場所で質の高い美術作品と接することの大切さを広めてきた原田丕氏は「市内の小中学校とも連携し、『ゆとろぎ美術館』の企画を通して子どもから大人まで交流を広げ、文化の力で市の活性化・地域づくりにつなげていきたい」と本企画のもう一つの意義を指摘しています。

本年度は６月、９月、12月、３月の４回作品の入れ替えを予定。生涯学習センターゆとろぎの「新しい可能性」を拓く事業として取り組んでいます。

2007年度展示事業の開催予定



※羽村市教育委員会主催の展示事業の予定です。この他に一般団体・個人主催の展示があります。
※各展示の開催日、開催内容などは変更になる場合があります。
※生涯学習センターゆとろぎは原則として毎週月曜日休館です。月曜日が祝日の場合は開館します。

ゆとろぎトピックス

このコーナーでは羽村市で行われている文化活動に関わる折々の話題を提供します。市民のみなさんに親しまれている「文化祭」は、羽村市の文化事業として市民参加の「文化祭実行委員会」が企画運営を行ってきました。時代時代でさまざまな苦労があったようですが、今年は「第38回」を迎え、羽村市文化協会を主管として盛大な開催が企画されています。そこで、今回は「文化祭」の起源をたどってみました。次号（10月1日発行）では、第38回羽村市文化祭について詳しくお伝えします。

「今は昔」のお話ですが、文化祭の起源を探ってみました

―今年の第38回文化祭を前に―

■文化祭の起源は、どこに？

羽村市文化祭は、1970（昭和45）年11月1日から3日にかけて、中央館と当時の羽村町役場を会場にして行われた「第1回総合文化祭」が起源です。

70年10月23日発行の『はむらの社会教育』（第14号）に文化祭開催のお知らせとともに、「食欲の秋、読書の秋、そして文化の秋がやってきました。私達は毎日いそがしい日を送っていますが、この機会に絵画とか音楽、その他の文化活動に接して、日ごろ忘れかけている情操を高めて、自分達の生活を精神面でも物質面でも向上させたいものです」とユーモアを織り交ぜて、格調高く文化祭の意義が記されています。同時に「文化祭は文化連盟が中心となった文化祭実行委員会の運営で行われます」とも記されています。このときから「市民の手による文化祭」が始まったといえます。

『第1回総合文化祭』（1970年）のプログラム

会場 ＼ 日程		1日（日）	2日（月）	3日（水）
中央館	第一集会室	郷土研究会 9時―4時	郷土研究会 9時―4時	郷土研究会 9時―4時
	第二集会室	お茶会 10時―4時	お茶会 10時―4時	
	第三集会室			人形劇 10時―4時
	図書室	絵　画 9時―4時	絵　画 9時―4時	絵　画 9時―4時
	ホール	発表会 11時―4時 書　道 9時―4時	華　道 11時―4時 書　道 9時―4時	華　道 11時―4時 書　道 9時―4時
役場	第一会議室	盆　栽 9時―4時	盆　栽 9時―4時	盆　栽 9時―4時
	第三会議室	婦人グループ活動発表 9時―4時	婦人グループ活動発表 9時―4時	婦人グループ活動発表 9時―4時
	和室	将棋大会 10時―4時		囲碁大会 10時―4時

＜催し物＞
将棋大会会費（昼食代・賞品代）300円（小中学生は150円）
囲碁大会会費（昼食代・賞品代）300円
お茶席券（お茶・お菓子代）100円

■どんな内容だったの？

上の表に記された内容が行われています。展示部門には郷土研究会、絵画、華道、盆栽、婦人グループが参加し、発表部門には琴、三味線、詩吟、コーラス、民謡が参加しています。この他に「催し物」部門として、将棋大会、囲碁大会、お茶会、人形劇杉の子公演が行われています。日程も参加団体数も小規模ですが、「これから羽村を文化的な町にして行こう」という市民と行政の熱意が開催を成功させたのではないでしょうか。現在の「協働」の始まりといってもよいでしょう。

■「文化祭」が始まる以前はどうだったの？

『はむらの社会教育』の第1号（67年9月27日発行）に『見にきた人も歌って楽しめる　第5回音楽の夕べ』という催しの案内が記載されています。「町の中の音楽団体が、日頃きたえたのどや、腕を発表する場」として、PTAのコーラスやフォーク・軽音楽・ジャズ・ハワイアンの市民バンドが出演しています。また、これを聴きにきた人とアコーディオン伴奏で「年齢に関係なく楽しく歌って」音楽を楽しんでいたようです。ですが、参加者が減少し、68年の第6回が最後となりました。「教育委員会では、音楽の夕べにかわって、町内の音楽団体を育てて行く基礎的な仕事を続けて行きますが、時期をみて、この音楽の夕べを再会したい…」と69年9月20日の『はむらの社会教育』で述べています。こうした文化的な催しが行われていたことが、文化祭開催の下地になっていたのではないでしょうか。

■ところで、第1回の様子はどうだったの？

気になるところですよね。70年12月5日の『はむらの社会教育』に「総合文化祭盛大に終わる」と題して、報告が載っています。

「連日の好天に恵まれ、朝から晩まで、小さいお子さんからお年寄りの引きも切らさずの観覧に、主催者側もうれしい悲鳴を上げていました」ということですから、きっと、連日予想外に大勢の町民が押し寄せたのでしょうね。ホールで行われた発表会は、「延べ五〇〇名くらいの聴衆が中央館ホールをいっぱいにうめ、知人のまじめな顔の演奏に盛んに拍手していました」と伝え、「催し物」の中には「あまりにたくさんの人が見に来てくれたおかげで『満員札止』の時間も……」とあります。展示の部では、来場者が「文化活動の多さに感心」したり、「『もっと掘り下げた研究を』と会場のあちこちに議論の花を咲かせていました」と主催者・出演者・観客が一体となった盛況ぶりがリアルに残されています。そして、「一人でも多くのみなさんが、自分の趣味をのばして、情操を高め、同時に同好の士が集まってやるグループ活動の楽しさを十分味わっていただきたいものです」と結んでいます。

■なんだか、ものすごい熱気を感じるね？

そうですね。高度経済成長の時代にあって、市民と行政がいっしょになって、文化祭を通して「新しい町づくり」を始めようとする熱意のようなものが感じられますね。

『公民館10周年のあゆみ』（84年10月発行）に『総合文化祭』というのは、羽村町の文化状況や学習状況、あるいは社会教育活動への参加状況の大きなバロメーターになっているといえそうです」と記されています。

そういう意味では、現在の文化祭は「熟成した時期」にあるのかもしれません。ゆとろぎが完成して一年、市民のみなさんの文化活動はますます活発になっていますし、今年の文化祭が楽しみです。その内容は秋号（10月1日発行予定）で詳しくお伝えします。

（本文中の引用文はすべて原文のまま掲載しました）

当時の出来事

1970年、大阪で日本万国博覧会（大阪万博）が開催され、アポロ11号が月面から持ち帰った「月の石」が大人気を博した。この少し前、64年10月1日に東京・大阪間に「夢の超特急」東海道新幹線が開業し、10日に東京オリンピックが開幕（後に国民の祝日「体育の日」となった）。国鉄（現在のJR）の『ディスカバー・ジャパン』（副題が「美しい日本の私」）の掛け声とともに日本中が一大旅行ブームに沸き、アンノン族が生まれた。72年、連合赤軍の浅間山荘事件。田中角栄氏が『日本列島改造論』を掲げて総理大臣に就任。74年、「金脈問題」で退陣。そして、日本は第一次オイルショックに見舞われ、高度経済成長の時代は終わった。

ゆとろぎアカデミア

『ゆとろぎアカデミア』は「アカデミックな内容をカジュアルな雰囲気で気軽に学ぼう」というコンセプトのもとに、ゆとろぎで開催される学習･文化講座の総称です。生活･暮らしの問題、文学、科学、地域社会の問題など、幅広いテーマで講座を企画しています。また、講座を通して参加者の交流も大切にしています。

※講座の申し込み・問い合せは生涯学習センターゆとろぎ☎042（570）0707へ

第２回 明るい定年を迎えるための総合講座
～生き生きとした人生80年をめざして～

昨年好評だった『明るい定年を迎えるための総合講座』を今年は４回にわたって開催します。

講座の内容は、定年を前にしてこれだけは「必ず知っておきたい」年金・預金・投資や老後の家計の目安などの定年後の家庭経済の話から自分らしい生き方、家族・夫婦の新たな関係のあり方、心身の健康などについて、それぞれの専門家を講師に招いて具体的に学びます。

受講料は各回一人７００円（飲み物代含）。受講定員はありませんが、準備の都合上、受講を希望する方はゆとろぎ窓口で直接お申し込みいただくか、ＦＡＸまたは往復ハガキに受講を希望する講座名・受講者の氏名・住所・電話番号・ｅメールアドレスを明記の上、ゆとろぎ事務局へお送りください。

定年は人生の通過点。その先には何十年という人生が待っています。となれば、しっかり学んで、生き生きとした人生80年をめざそうではありませんか。

回	講座名・講師・ゲスト	主な内容	開催日・会場・受講料
1	**定年後を自分らしく生きる** ～新たな夫婦のあり方をめざして 作家・定年塾主宰者 西田小夜子氏	「家庭不在」の夫と「夫不在」の妻との新たな夫婦のあり方と夫婦がともに「自分らしく生きる」ことの大切さを探る	８月25日（土） 10:00～12:00 講座室１ 一人700円
2	**定年後の賢い家計設計** ～明るい人生設計をめざして ファイナンシャル・プランナー 田中博氏	定年後の家計はどうなるのか、どうしたいのか。退職金、失業保険、年金、債務返済、税金などなど、不安のない収支バランスをシュミレーションする	９月１日（土） 10:00～12:00 講座室１ 一人700円
3	**定年前後の法律テーマを考える** ～明るい家族関係をめざして 弁護士 堀田和宏氏	定年を機に借金返済・財産贈与・夫婦関係などに関する法律の基礎知識を知り、明るい夫婦・家族のあり方を考える	９月22日（土） 10:00～12:00 講座室１ 一人700円
4	**定年後の“健康”を考える** ～健やかな人生80年をめざして 杏林大学講師 朝野聡氏	明るく、楽しい「第二の人生」は心身ともに“健康第一”から。健やかな身体と心で人生80年を生き抜く知恵を学ぶ	10月６日（土） 13:00～15:00 講座室１ 一人700円

ゆとろぎ サロンでトーク 第３回
体験的絲繍（シルクロード）之路映像紀行

写真と話：平田栄一氏（フリーランス編集者・写真家）
開催日時　８月18日（土）午後７時～８時30分
会　場　ゆとろぎ　交流広場
参加費無料（飲食代は参加者の自己負担）

『ゆとろぎ サロンでトーク』は、羽村市内外から有名無名のゲストを招き、体験・経験談や専門分野のお話などを気軽に見聞する「おとなの雑学講座」です。

第３回は、フリーの編集者・写真家の平田栄一氏をゲストに迎えて、デジタルカメラによる写真とお話で発展著しい中国の西域地方の街並や歴史遺産をバーチャルツアーします。

参加費は無料ですが、飲食代は参加者の各自負担です。当日の飛び入り参加も歓迎ですが、参加を希望する方はゆとろぎ事務局へ事前にお申し込みください。

真夏の夕暮れ、冷たいビールを飲みながら、シルクロードを旅してみませんか？

嘉峪関（かよくかん）古城から天山山脈を望む

※飲酒運転は法律違反です。アルコール飲料を飲む方はお車での来場はご遠慮ください。

ゆとろぎクラブ

「ゆとろぎクラブ」は市民のみなさんと生涯学習センターゆとろぎ及びゆとろぎ協働事業運営市民の会を結ぶ交流の場です。ゆとろぎからの情報だけでなく、市民のみなさんからの呼びかけ、問いかけ、事業に対するご批判、ご提案も大歓迎です。「市民一人ひとりの生涯学習を支援する」ために市民のみなさんからの情報をお待ちしています。

「ゆとろぎ寄席」の入場券を地域のお客様にプレゼント

―㈱桝屋 創業100周年記念事業で

唐突ですが、みなさん、スーパー・マルフジが「イベント応募者に『ゆとろぎ寄席』の入場券をプレゼント」ってご存知ですか？

実は、西多摩地区で幅広く事業をすすめるマスヤ・グループが創業１００周年記念事業として実施しているもので、『桝屋・マルフジお宝グッズコンテスト』並びに『西多摩百年掘り出し写真コンテスト』の参加賞として『ゆとろぎ寄席』の入場券を応募者全員にプレゼントするというものです。地域密着企業のマルフジとゆとろぎが手を結んだ企画です。

そこで、㈱桝屋の代表取締役社長、加藤和夫さんにゆとろぎや地域文化などについてお話を聞いてみました。（取材・江久保千英）

（株）桝屋代表取締役社長　加藤和夫さん
昭和28年千葉県生まれ。早稲田大学商学部（硬式野球部キャプテン）卒業。日産自動車勤務を経て、昭和54年、（株）桝屋入社。平成19年５月、代表取締役社長就任。福生交通安全協会会長、青梅法人会理事、福生市商工会副会長。

「羽村」のゆとろぎから「西多摩」の文化発信基地に

マスヤ・グループはゆとろぎが開館以来、公演チケットの販売などでゆとろぎに積極的な協力を行なっています。

その理由を加藤社長は「羽村発祥の企業として、ともに地域を盛りたてていきたいから」と言い、ゆとろぎに対して「羽村市という狭い枠にとらわれず、西多摩の文化発信基地として大きく成長してほしい」とエールを送ってくれました。

ゆとろぎと地域企業の新しい関係作りを

マスヤ・グループによるチケットの委託販売は「買い物にみえるお客様に『ついでに買えて便利』と喜んでもらえ、次の来店のきっかけ作りにつながる」という理念に基づいています。

ゆとろぎと地元企業との関係について、「企業がイベントに協賛金を出すというような「一方通行」の関係ではなく、お互いにメリットのある関わり方をみつけていくことが大切」と言い、また、マルフジのお店は、ゆとろぎに気軽に足を運べるお客様のエリアと重なっているので、「地域のみなさまにも、ゆとろぎにも、会社にも、三方向に「利」のある面白い企画を出し合って協力していけるといいですね」と心強い提案をいただきました。

地域志向とお客様志向で新たな一〇〇年をめざして

最後に、１００周年記念事業ついて、「かつての西多摩の風景、牛小屋、鶏小屋、養蚕農家、荷車を引いた馬が行き交う土の道、ダムに消えた村などなど、時代を知らない世代が多くなってきました。

時代の波にもまれながらも、桝屋が企業として成長してこられたのも地元志向、お客様第一の基本姿勢を大切にしてきたからこそで、西多摩発展の１００年はまさにマスヤ・グループの１００年でもあるのです。そんな時代の空気と会社の歴史を振り返り、新たな１００年への節目にしたい」と未来を見据えた経営者の顔が返ってきました。

ゆとろぎは、羽村の、いや、西多摩の文化発信基地を目指して、市民と地元企業とのさらなる「協働」を推し進めます。

※『㈱桝屋創業１００周年記念事業』の詳細はお近くのマルフジ各店にお問い合わせください。

生涯学習センターゆとろぎが『東京建築賞』を受賞しました！

先頃、社団法人東京都建築士事務所協会が主催する『東京建築賞・第33回建築作品コンクール』において、ゆとろぎの施設が「一般部門二類優秀賞』を受賞しました。

受賞理由は、建物と街並の一体感、室内環境に配慮した自然採光、周辺環境への「周到な配慮」、開放性と親しみ易さなどの建築デザイン上の優れた点に加えて、「人口５万人台の市にとっては、規模の大きい施設にも思えるが、現地審査において、市民によく利用されている状況を確認することができ、市の中心的文化施設として、適切なプログラムと規模を備えていることを認識させられた」と市民の利用状況も評価されてのことです。設計者の（株）久米設計をはじめ、建設にたずさわった方々、そして、利用者である羽村市民にとって、なによりの「褒め言葉」ではないでしょうか。市民の憩いと学習文化の拠点として、ゆとろぎをご活用ください。

【お詫びと訂正】

本誌春号（４月１日発行）に掲載の『府中市美術館を訪問研修しました』の記事で、非営利団体「ＮＰＯアートプロジェクトＴＡＭＡ」及び市民ボランティアのサポートスタッフについて不正確な記述があるとのご指摘をいただきました。府中市美術館並びに関係各位、読者の皆様にお詫びを申し上げ、左記のように訂正させていただきます。また、ご指摘を頂戴した読者のご親切にお礼を申し上げます。

府中市美術館では入館者のガイドや入場券販売、ショップの管理運営などは美術館が行っています。非営利団体「ＮＰＯアートプロジェクトＴＡＭＡ」は府中市美術館からの委託をうけて、市民ボランティアであるサポートスタッフの育成を行い、子どもたちや市民にいっそう親しみのある美術館をめざして活動しています。

季刊ゆとろぎ●２００７年夏号
２００７年７月１日発行（通巻６号）
発行■羽村市教育委員会
企画■羽村市生涯学習センターゆとろぎ
編集■ゆとろぎ協働事業運営市民の会
〒２０５－０００３
羽村市緑ヶ丘一－十一－五
☎０４２（５７０）０７０７
http://www.city.hamura.tokyo.jp
印刷■（株）東光社
〒１１４－００１３
東京都北区東田端一－二－十二
☎０３（３８１０）９３３１
編集■江久保千英・近藤静子・関沢和代・日下田まや・平田栄一・船橋瑛・古澤義隆・村山利夫・山本豊・横田矗・渡部清孝・羽村市生涯学習センターゆとろぎ
写真■村山利夫・平田栄一
無断転載をお断りします。
Copyright ©2007 by YUTOROGI
All rights reserved.